

令和 8 年度 教育研究推進計画

1 研究主題

「かかわり合い」「わくわくいっぱい」「ちからをつける」算数科の授業づくり
～思考力・判断力・表現力の育成に向けた協働的な学びの充実を通して～

2 主題設定の理由

令和 7 年度の研究主題は「『協働的な学び』の充実による、児童が主体的に学ぶ算数科の授業づくり～ICT を有効に活用して～」であった。主体的に学ぶ姿勢は児童一人一人の理解の定着を支えるものである。その主体性の高まりを図るため、ペア・グループでの活動や全体交流の場面を設定したり、児童がいつでも友達の考えを参考にできる環境を作ったりして、児童が友達へ自分の考えを伝えながら学ぶ、あるいは、児童が友達の考えを聞きながら学ぶことができる授業づくりに取り組んだ。また、児童が思考を整理・深化させられる協働的な学びとなるよう、ICT を活用した伝え合いを取り入れた。

【成果】

- ペア・グループでの活動や全体交流などの協働的な学びを仕組むことで、児童一人一人が課題を解決でき、個の学びのねらいを達成することができた。
- 個人思考の場面でタブレット端末へ書き込んだり、タブレット端末を通して多くの友達の考えを参考にしたりすることは、個の学びの充実につながった。
- 児童へのアンケート「算数の時間にみんなでいろいろな考えを発表し合う事が好き」の回答結果が 1 学期 89.5%、2 学期 86%と主体性についての自己評価が肯定的な児童が多い。

【課題】

- ペア・グループの活動や全体交流で、伝え方や聞き方に課題があり、相手意識の低さが見られた。
伝え方の課題…算数用語、式、図を適切に使い、順序立てて説明できていない。
聞き方の課題…自分の考えと比べながら聞くことができていない。
- 三学期算数科単元末テストの思・判・表の項目の学級平均の結果…
1 年 %、2 年 %、3 年 %、4 年 %、5 年 %、6 年 %
(5 名以下の学級があり、個人情報保護のため、HP への数値の掲載は省略しております。)
三次市学力到達度検査算数の思・判・表の項目の学級平均の結果…
3 年 %、4 年 %、5 年 %、6 年 %
(5 名以下の学級があり、個人情報保護のため、HP への数値の掲載は省略しております。)
⇒アンケートで見られた主体性の高まりが思考力・表現力等の学力に結びついていない。

これらの結果から、協働的な学びを意図的に仕組むことで児童が自分に合った方法で課題を解決することができたと言える。しかし、協働的な学びの在り方について、思考力・判断力が深まるような活動に至っていないこと、相手意識を大切にした伝え方・書き方（表現力）に課題がある。

また、ICT の活用については、個別最適な学びの達成において重要なものではあるが、児童の実態や単元・授業のねらいに合わせて柔軟に活用することが大切であることが明らかになった。

そこで、令和8年度の研究主題を「かかわり合い」「わくわくいっぱい」「ちからをつける」算数科の授業づくり～思考力・判断力・表現力の育成に向けた協働的な学びの充実を通して～とする。思考力・判断力・表現力の育成に向けた協働的な学びについては、令和7年度に取り組んだ学習形態の工夫に加え、協働的な学びができている姿を全職員で共有して研究を進めていく。

3 研究仮説

協働的な学びを充実させ「かかわりあい」「わくわくいっぱい」「ちからがつく」算数科の授業づくりを行うことで、思考力・判断力・表現力を育成することができるだろう。

- ① 「かかわり合う」授業とは、児童の姿を次のように想定する。
 - ・相手に伝わるように筋道立てて、最後まで伝えきる。
 - ・形式的に「分かりました」と返事をするのではなく、「なぜそうなったのだろう」「自分の考えとどう違うのだろう」と批判的に考えながら聞いている。
 - ・分からないときに自分から「どうして」と友達に聞くことができる。
 - ・自分たちでかかわり合い授業をつくっていく。

- ② 「わくわくいっぱい」の授業とは、児童の姿を次のように想定する。
 - ・学習したことを日常生活や他教科等でも使ってみる。(生きた算数)
 - ・学習したことを自主学習で自分でやり直してみる。
 - ・めあてを設定できる。(教科書の文言を活用し、何を学ぶのかが分かり、自分の言葉で表せる。)
 - ・「たし算ではこうだったけど、ひき算ではどうなるか」等、学習したことを使って、自ら類推的に考察している。
 - ・自ら問いとまとめをつくることができる。
 - ・分かったこと等の本時の学びのふり返りを自分で書くことができる。

「小数のかけ算で、〇〇さんの考えを聞いて、0.1を1つ分として整数で考えてもできることが分かりました。友達のやり方でもやってみようと思いました。」

- ③ 「ちからをつける」授業とは、児童の姿を次のように想定する。
 - ・数学的な見方・考え方を働かせる(図、式、表やグラフ、絵、言葉を用いて、それぞれを関連付けながら表現している。)
 - ・「つまり～」と一般化していく表現や「例えば～」と具体化していく表現ができている。
 - ・問題解決の過程や結果を振り返って、得られた結果を捉えなおしたり、新たな問題を見いだしたりして、統合的・発展的に考察を進めている。

「小数も整数も位をそろえて考える方法は同じだな。」

「整数のときにかけ算でできたから小数でもかけ算でできる。」

 - ・ 数学的な見方・考え方を働かせて問題を解決している。

「前の時間に学習した計算のきまりを使って、問題を解いてみよう。」

 - ・ 数学的な見方・考え方を働かせて協働的な学びの場面で思考・表現している。

「1 m 20 cm－90 cmで単位をそろえて計算しようと思いました。1 m＝100 cmだから、1 m 20 cm＝120 cmです。120 cmからなら90 cmが引けるようになりました。120 cm－90 cm＝30 cmで答えは30 cmです。単位をそろえると筆算の形で計算できるようになりました。」

5 研究方法

「思考力・判断力・表現力」を育成するための研究授業を中心に次の研究方法に取り組む。

① 「かかわりあい」「わくわくいっぱい」「ちからがつく」姿を明確にして授業を行う。

単元を通してどのような力を身に付けさせるのか、身に付けた姿はどのような姿か、学習の中でどのような表現をすればよいのかを明確にして、指導案作成する。また、令和7年度までは担任3人ずつでグループを組み、日常的に教材研究や参観授業等を行い、研究を進めてきた。令和8年度はグループを解消し、職員全体で協議を行い、具体的な姿を交流しながら研修していく。

② 単元の学習を通してめざす児童とはどのような姿か、協働的に学ぶ児童の姿はどのような姿(発言)かを学習指導案に明記する。

③ 「単元構想(問い)シート」を活用した教材研究、事前研修、事後研修を行う。

単元で身に付けさせたい思考力・判断力・表現力と児童の問いとが結びついた単元になるよう構想し、単元計画づくりへ生かしていく。授業実施3週間前に事前研修を行い、単元構成・授業の流れ・悩んでいること等を共有する。また、事後研修では、想定していた問いと実際の児童の思考や発言はどうであったかを比べることで単元構想についての評価を行い、授業づくりの在り方についてふり返る。

④ 事後研修で協議の柱を設定する。

協議をする際に、次の3つの視点を中心に協議を行う。

「協働的な学びの充実(「かかわり合う」「わくわくする」児童の姿)について」

「自分の考えを言葉で表現している姿(思考・判断・表現)について」

「数学的な見方・考え方を働かせている姿(「ちからをつける」姿)について」

また、学びを支える基盤作りとして、日々の授業づくりにおいて次のことに取り組む。

① 視点到りこみをさせる。

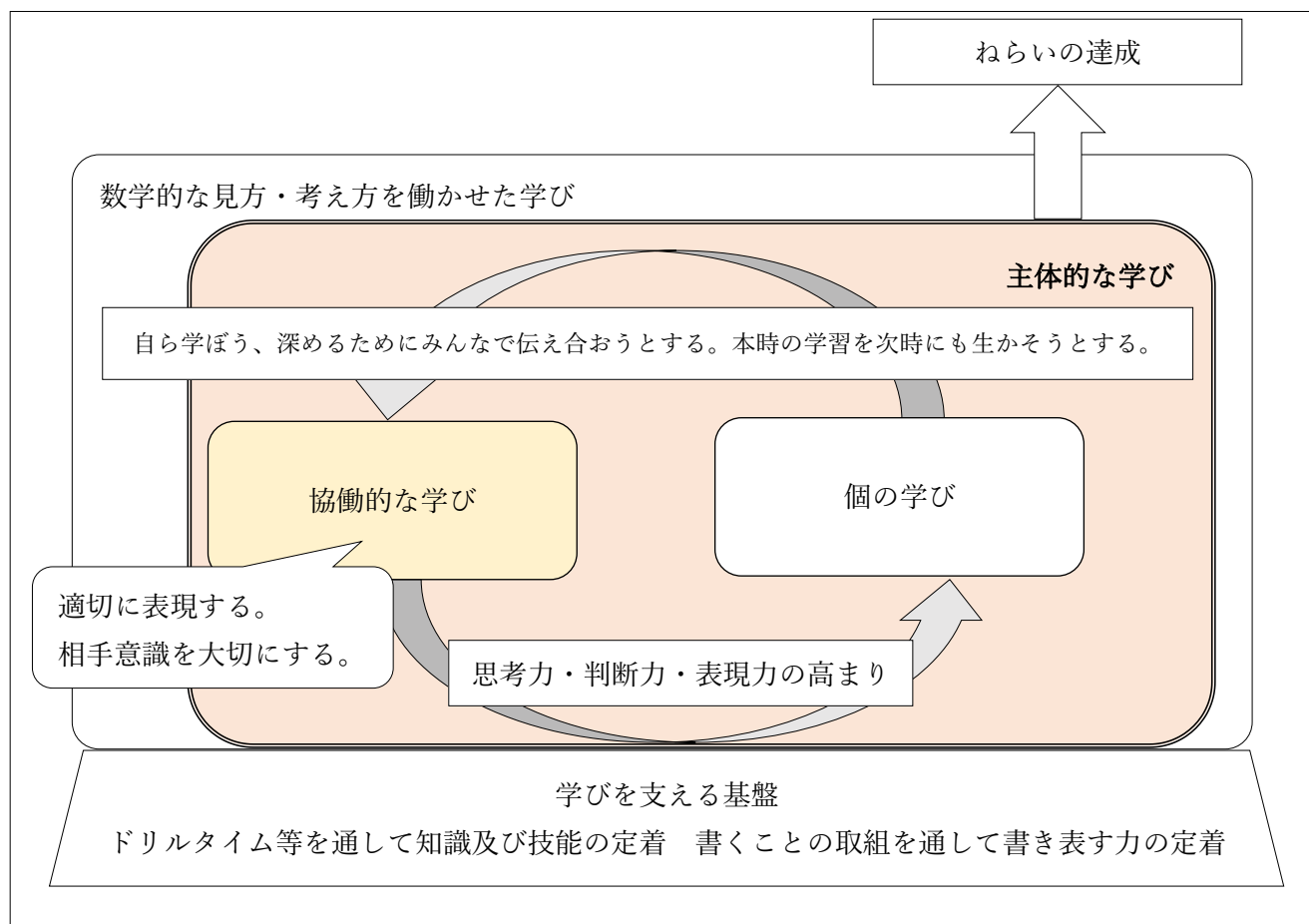
- 「わかったこと できるようになったこと」
- 「まえのじかんとにていること・ちがうこと」
- 「これからもつかえる かんがえかた・わざ」
- 「なぜ まちがったのか」
- 「友達の『あの一言』 友達から学んだこと」
- 「生活の中で 役に立てられそうな場面」

② 「ドリルタイム」「かくぞう朝会」の取組を積み重ねる。

思考力・判断力・表現力の定着に向けてミライシード等を活用し、個別最適なドリルタイムの充実や家庭学習を計画的に進める。また、令和7年度の全国学力・学習状況調査の結果を分析したところ、書くことへの取組が課題の改善に向けて必要であることが分かった。そこで、かくぞう朝会や各教科の学習で自分の考えを書く機会を確保し、書くことに慣れ親しませるとともに、学習用語を使って書く力や条件に合うように文章を書く力を高めていく。

④ 複式学級における学びを生かして、考えを出し合いながら課題を解決するという意欲を高める。

令和7年度より一部の学年で複式学級が編成されている。児童が学習リーダーを中心に自立した学びを進める姿を目指して取り組んでいる。「本時のめあては何だろう?」「どの考え方を使えば解決できるのだろう?」と見通しをもち、一人一人が解決方法についての考えを伝えながら授業を進めている。この姿は通常学級においても目指す姿である。複式学級でも通常学級でも共通した児童の学ぶ姿を目指すことを大切にして授業づくりを行っていく。



6 検証方法

「協働的な学びを充実させ「かかわりあい」「わくわくいっぱい」「ちからがつく」算数科の授業づくりを行うことで、思考力・判断力・表現力を育成することができる」について検証できるよう、次の方法で評価する。

検証項目	検証方法	検証指標
相手意識を大切にし、適切に表現しながら協働的に学ぶことを通して思考力・判断力・表現力を育成できているか。	・単元末の評価問題 ・ふり返り（ワークシート） ・学力調査の分析 ・単元末テストの分析 ・児童のノートの記述等	学びのふり返りについてのアンケートを学期に1回 行い「かかわることができている」「わくわくする」「 「ちからがついている」についての高まりがあるか。 （肯定的に回答している児童が増えているか。）
		・単元末テストにおいて、思考・判断・表現の項目の正答率が80%以上。 ・「評価問題」の正答率が80%以上

○ 学期に1回、単元末に評価問題とふり返りを行う。

「評価問題」 説明を記述する問題	「学びのふり返りについてのアンケート」 ① かかわり合うことで問題解決できた。 ② わくわくがいっぱいあった。 ③ 新しい問題もクリアできた。 「ふり返りの記述」 「友達の意見を聞いて～に気付くことができました。」 「生活の中で～」など ⇒ 記述内容で児童の主体性について評価する。
--------------------------------	--